

メルティング・ポットのニューヨーク

黒 沢 香

ニューヨーク市は、米国において最もアメリカ的であるがゆえに、「典型的なアメリカの街」になれない都市と言えます。その住民と文化の多様性はまさに「アメリカ的」ですが、同時にそこに住む人の多くは新しい移民やその家族であり、「典型的なアメリカ人」から遠くかけ離れた人たちです。国の経済と文化の中心でありながら、多数の合衆国民にとって、どこか異界のイメージすらあります。ごく普通のアメリカ人なら、観光で訪れるのならともかく、そこに住むことなど考えたくもないようです。私の専門である社会心理学でも一般によく都市や都市問題、社会問題を扱いますが、私個人の専門分野は都市を語り米国を語るということと、それほど密接な関係はありません。そこでこの章では、大学院生活の間ずっと過ごしたニューヨーク市について、「メルティング・ポット」の考え方や移民問題を中心に、あまり堅苦しくない形で解説してみたいと思います。

メルティング・ポット (a melting pot) について

‘人種の’るつぽ

ニューヨーク市について語る前に、まず今回のテーマである「メルティング・ポット」ということについて考えてみましょう。メルティング・ポットは日本語ではよく「人種のるつぽ」というふうに訳されます。それでは人種のるつぽとは、いったいどんなことを指しているのでしょうか。

言葉の上からは、a melting potとはもともと「るつぽ」という意味であり、これはセラミックなどの容器で、何種類かの金属を入れて熱し、合金を作るためのものです。米国では「アメリカは a melting pot である」とい

う言い方をします。これはもちろん喩えであり、アメリカで何かが「混じり合い、溶け合い、新しいものが生まれる」ことを意味しています。奇妙なことに、この英語の言い方には「人種の」という、日本語で必ずといってよいほどつけ加えられる形容詞がありません。

米国で「人種の」と言わない理由と、逆に日本語でわざわざ「人種のるつぽ」と言う理由について考えてみましょう。私なりの解釈をすれば、a melting pot ということは、アメリカでは多民族の「文化」が混じり合い、溶け合い、新しい文化が生まれるということを意味しているように思われます。ひるがえって、どうして日本では「人種のるつぽ」になったのでしょうか。これも私の解釈ですが、私たち日本人は多文化・他文化ということを理解するのがどうも苦手なようです。ですから多くの文化が混じり合い、溶け合い、新しい文化ができるというイメージがなかなか、わいてこない。それで人種のるつぽというふうに、翻訳や解説などの時に解釈してしまったのではないのでしょうか。

文化ということ

ここでキーになる考え方は文化です。もちろん文化といっても色々な意味があります。一般に使われるとき、文化という言葉は文化センターや文化活動というように、芸術文化や教養的文化、高尚な文化を意味することがよくあります。しかし、もうお分かりと思いますが、ここで混じり合い、溶け合うと言われている文化はいわゆる生活文化であり、日常行動の文化であると言ってよいでしょう。それは民族や社会、地域によって違う、生活の仕方、行動の仕方、考え方についての文化です。

「文化」のこの意味は、最近では日本でもよく理解されるようになってきました。たとえばよく日本にはコメの文化があると言われる。これはもちろん、コメが高尚であるとか、芸術的であるとかの意味ではなく——もちろん芸術的なコメ作りもコメ料理もありえますが——私たち日本人が水田をつくり稲を育てる。そしてコメを愛し、日常的に食べることの全体的なやり方を文化としてとらえています。ですから、特定のコメを育て、日本では短粒米ですけれど、そしてそういうコメを好んで食べるということがここで言うコ

メの文化ということになります。東南アジアでは長粒米、いわゆる外米を食べます。それがつまり文化の違いである、ということですが、そのいずれもがコメの文化と言え、コメをどのように料理して食べるかということも、もちろんこれに含まれます。このような説明で、「文化」の今ここで述べている意味が、だいたい理解していただけたと思います。そしてこういう意味の文化こそが、アメリカのメルティング・ポットで混じり合い、溶け合うとされたものだと思うのです。

文化と民族

ところで、日本人はよく自分たちの国が単一民族の国家であると考える傾向があるようです。そういう趣旨の発言をする人があると必ず、国内の少数民族にあたる人たちは、自分たちが切捨てられてしまったとして反発し問題にします。このような抗議は当然のことですが、単一民族の考え方はこの国が単一文化であるという見方から出てきているようです。つまり単純に考えれば、現在の日本人は単一民族と呼べるほど、大多数の人が同じような考え方をし、行動し、生活しているという考え方です。この次に説明するように、民族という考え方には「文化」という要素が最も重要ですから、そういう考え方でもできます。しかし単一文化・民族という思い込みは逆に、たくさんの文化ということを想像し、それが混じり合い、溶け合うという壮大なイメージには結びつきません。だから「人種のるつぼ」というような解釈が生まれたのではないか、というのが私の推測です。

それで本当に、南北に細長く、かつては南と北の両端の人たちの話がうまく通じなかった日本が単一文化の国かと言え、どうもそうとは言えない面が多いように思います。もちろん現代はマスメディアの影響もあり、だんだん文化も単一化するとか、全国的に皆同じようなことを考え、同じように感じ、同じような行動をとり、同じような生活をする、という社会ができあがりつつある、という点は否めません。現代のわが国における、このような変化が、アメリカでのメルティング・ポットの考え方の、たくさんの文化が混じり合い、溶け合い、まったく新しいものが生まれるということと、いったいどんな関係にあるのか、興味深いものがあります。

いずれにしてもアメリカは移民の国です。これが今述べているテーマと大きく関連している基礎的事実ですが、移民の国ですから、そこにたくさんの民族がいて多様な文化があることが当然であり、そこから自然にメルティング・ポットの考え方が生まれてきました。それに比べ、まだ日本では民族ということがあまりよく理解されていないようで、これまでどちらかといえば人種という言葉がよく使われてきましたが、人種ということもよく考えれば、特に米国のような国では、あまり意味のないことです。

たとえば、黒人といっても色々な人がいます。アメリカにもう何代も住んでいる黒人は、アメリカの黒人であって、たとえ自分たちをアフリカ系と呼ぶことがあっても、アフリカに住む黒人とは文化的にはまったく何も共通するものはありません。それにもかかわらず「黒人」は「黒人」だから人種が同じとひとまとめにしてしまうのでは、現実があまり分かっていないことになります。そこで最近では人種ではなく民族と言います。最近のはやりの言葉ではエスニック集団 (ethnic groups) です。エスニックと言うと、最近の日本ではすぐにエスニック料理と結びつきますが、この言葉はそもそも、それぞれの民族に特有な料理を意味しているわけです。

このように民族という考え方には、人種という意味合いよりも、その人たちの文化に着目するような意味合いがもともと強いということを理解することが重要です。人種というより文化が中心なのです。これから述べることで、～系とか～人と簡略化して呼ぶことがありますが、これは人種ということではなく、民族あるいは「民族文化集団」というような意味ですので注意が必要です。またこのような考え方は、いわゆる人種差別と呼ばれているものの大部分が実は民族差別であることを示しています。差別が起こるのは、人種が違うことが原因ではなく、文化が違うこと、あるいは「文化への帰属意識」が違うことが主な理由なのです。近代は国家の時代でした。それは同時に、国家間の戦争という形の問題を生みました。最近は再びまた民族の時代になったのかも知れません。残念なことに、いわゆる民族紛争がこの時代を象徴しているようです。

人種ということ

この章の始めに、「人種のるつぼ」とはどんなことを指しているのか、あるいは、どんな意味かという質問を投げかけました。私自身がこの言葉の持つ意味、あるいはイメージを考えると、日本人の言う「人種のるつぼ」とは、人種が混じり合い、溶け合うことを意味しているようには思えません。ただ単純に、たくさんの色々な人種がゴチャゴチャといる、というだけのイメージでしかないと思います。もし本当に、人種がるつぼの中で溶け合ってしまったら、きっと灰色の（あるいは最近よく言われる、虹色の）人種ができるのでしょうか、日本人はそういうことを考えてはいないでしょう。ただ単純に、色々な文化があり、たくさんの人種がいるというイメージなら、後で述べる「サラダ・ボウル」という考え方などのほうが本当は適切なのではないかと思うのですが、そのことは最後にまわします。

人種ということでもう少しつけ加えますが、人種という考え方もあいまいなものです。一般の人たちには、人種というものは非常にきちんとした区別であって、科学的にあるいは生物学的にはっきりと定義できるものだと思える傾向があるようですが、それは違います。人種というのは社会的にしか決められないものなのです。なぜかと言えば、混血という問題があるからです。たとえば、米国では何分のいくつまで血が混じっていれば黒人かということを決めるのが、昔は大きな問題でした。人種を現実的に具体的に規定しようとする、ということを考えざるを得ないわけです。

黒人と白人は生物学的に、あるいはDNAを使って、定義できるのかのように考える人がいますが、とんでもない思い違いです。そんなことは出来るわけがないのです。2つの人種の人たちが子供を作り、それぞれが2分の1ずつの時はどちらの人種にしますか？4分の1では？あるいは16分の1では？——かつて米国南部では差別的な法律が、黒人の血が32分の1でも混じっていれば、たとえ外見はまったく白人と区別がつかなくても、黒人であるとしていたらしいのですが、これを考えると、人種というのは自明のようで、あまりよく分からないものだということになります。こういう数字は勝手に決めることができ、たとえば32分の1だ、この数字にしようとする多数が言えば、それで決まるからです。

だからこそ、たとえば南アフリカでは最近まで、異人種の間で子供を作ることや結婚することが禁止されていたわけです。合衆国でも州によって、同じように異人種間の結婚が禁止されていました。そうしないと人種の決め方はどうにもならないのです。人種というのは、いかにも明白で科学的な根拠もあるように思われがちですが、まったくそうでなく、私たちがほとんど勝手に恣意的に、社会的に決めつけているものです。それで米国では人種という言い方よりも、民族あるいは民族集団ないしは民族文化集団というような言い方が多くなってきました。もちろんこれらも社会的に決められているものですが、そういうものであることがはっきりしています。

何が混じり合い溶け合うのか

ということで、日本人の多くはまだまだ、文化ということも民族ということも人種ということも、十分に理解していない、というような結論になるのかも知れません。それはともかく、それではメルティング・ポットの中で人種というものがどうなると、アメリカ人たちは考えていたのでしょうか。最初に述べたように、英語の言い方で「人種の」という、日本語で必ずといってよいほどある形容詞がないのはどうしてだろうかということになります。そう言わないのは人種が混じることを当然の前提にしていたからかということ、どうもそうとは言えないようです。

それはどうしてかと言えば、メルティング・ポットという考え方が出てきたころには、黒人だとか黄色人種だとかは同等の人間として、合衆国住民の頭の中になかったと考えられるからです。もちろん米国に住む黒人はずっといました。しかしこの考え方が流行し始めた時代には、やはりどちらかと言えば、合衆国での重要な人間はすべて白人であるという考え方が強かったと思います。そういう人たちの間で色々な文化が混じるという考えであったはずです。ですからやはり、この言葉の当初の意味として、米国で文化が混じり合うということは、アフリカやアジアの文化を含めて混じり合うのではなく、ヨーロッパの多様な白人文化が混じり合い、溶け合うことだったと思います。具体的には、西欧の文化と東欧の文化が混じり合う程度のことを考えていたのではないのでしょうか。

さて、米国は19世紀の後半から、世界的な勢力になってきます。いわば大国ということですが、よくアメリカでは、南北戦争（1861～1865）が終わったところから合衆国は大国になったと言います。それまでは英国などと戦い、苦しめられていたのですが、南北戦争の後では、この大きな内戦の経験などをいかして、戦えば勝つ、連戦連勝ということになりました。それで自分たちが正義だ、自分たちの国は特別なものだ、特別の使命を与えられている、という意識が強くなってきます。そういう時代の雰囲気の中で、たくさんの文化が存在するアメリカという新しい国で、色々な文化がひとつに溶け合い、これまでになかったような、まったく新しい、素晴らしい文化ができるのではないかという期待と、我々がそれを作り上げるという自負・誇りのようなものがメルティング・ポットという考え方を生み出したのではないかと考えられます。そしてその後、このメルティング・ポットの考え方が、米国でどのように評価されてきたかと言えば、世界中の文化が混じり合うことを意味した時代——たとえば、第二次世界大戦後——もあったと思います。しかし最近ではもう、あまりメルティング・ポットということを行わないようになりました。後でそのことについて述べるとして、今は話をニューヨーク市に持っていきたいと思います。

ニューヨーク市の過去と現在

メルティング・ポットが生まれる

これから述べるのは、アメリカがメルティング・ポットであると言ったとき、最も分かりやすい典型的な例として、最初にあげられるであろうニューヨーク市のことです。ここでいうメルティング・ポットとは、先ほど述べた、ただ単純に色々な文化があり、たくさんの民族がいるというイメージ程度のことを意味します。住民とその文化に関する限り、ニューヨーク市よりも多彩な都市はこれまでたぶん世界中どこにも存在しなかったし、現在もここに匹敵するような街はないでしょう。この事実はこれからも当分、変わることがないように思います。なぜニューヨーク市がそういう特徴を持つようになったのか、まず考えてみたいと思います。

歴史的に見ても、1660年、マンハッタン南端のアムステルダム砦の周辺でじつに18もの言語が話されていると当時のオランダ人提督が語ったことが記録に残っています。その当時のオランダ領ニュー・アムステルダムは、英国統治によりニューヨークに変わりますが、ニューヨークはそこからずっと、貿易や商業などアメリカの経済活動の中心でした。たとえば、金融ということなら、ウォール街があります。ウォール街というのはマンハッタンの南の先端近くにありますが、ずっと昔、アムステルダム砦のころ、この道路の北側に壁を立て、南側の狭い街区に北側の原野から望ましくない人間や野性の動物が侵入するのを防いでいたのが、この名前の発祥であるとされています。今も狭いこの範囲に重要な株式市場や金融機関がたくさんありますが、ここが世界の金融の最重要拠点になっています。

ニューヨークはアメリカ経済の中心であり、西半球あるいは全世界の経済を動かしていますが、それはニューヨークに日本の東京のような一極集中が起きていることを意味しません。もちろん市内に支店くらいはあるのでしょうが、アメリカの企業は相当数がわりと何もないような、とんでもない田舎に本社・本店をおくことがよくあります。東京のように、何でもかんでも中心地に本社がないときちんとした企業ではないように思われたり、うまく経営できなかつたりすることは、アメリカではあまりないようです。かなりの数の企業がニューヨークに本社をおいていないとしても、この街がアメリカ経済の中心であることは間違いありません。

それからニューヨークは、同時に政治の中心で軍事の拠点でもありました。たとえば、独立戦争にしても相当数の戦闘が市内で戦われています。ジョージ・ワシントンもイギリス軍に攻められ退却し、ハドソン河をニュージャージー州側に渡って逃げたことがあります。そういう古戦場が市内にいくつもあります。政治の中心としては、独立直後のほんの短い間ですが、ニューヨークが合衆国の首都になりました。ウォール街に連邦ビルと呼ばれる建物がありますが、その前にジョージ・ワシントンの銅像が立っています。彼はこの建物で大統領になる宣誓をしたということですから、ワシントンが大統領のころはニューヨークが合衆国政府の所在地だったわけです。国内政治に限れば、今は連邦の首府も州の首都も他にあることから、現在はそ

れほど政治的色彩は濃くありません。しかし国際政治を考えれば、ニューヨークにある国連本部を忘れるわけにはいきません。これがたいへんに重要な意味を持つことは言うまでもないと思います。

次に文化や観光の点です。ここでいうのは芸術的文化のほうですが、たとえば演劇やミュージカル、オペラや音楽、ダンスなどの文化の発信地になっています。その他にも映画があります。意外に思えるかも知れませんが、ハリウッド以前はニューヨークが映画の都だったので、今でも市内でたくさんの映画が製作されています。それからテレビ局ですが、ABC、CBS、そしてNBCのいわゆる三大ネットワークが、すべてニューヨークを拠点にしています。最近ではCNNが第4の放送網として、よく知られるようになりましたが、これはニューヨークでなく、アトランタのTBSが拠点です。その他、多くの博物館や美術館、有名な建物やホテルが多く、イベントやスポーツなどのアトラクションで国の文化の一大中心となっており、また観光客が国内はもちろん世界中から集まってくる都市であることを見逃すことはできません。

移民の到着

ニューヨークが常に多種多様な文化と人種・民族の集う都市であった理由で、日本人にはあまり知られていないが特に重要なのは、ここが旧世界からの新移民の上陸地であったという歴史的な事実でしょう。南北戦争の後でいわゆる新移民が増え、その入国を管理する目的で、東はニューヨークが、西海岸ではサンフランシスコが移民入国の地点となりました。大西洋を渡り、ベラザノ海峡を通過して、ニューヨーク湾に入ってくると、移民船に乗った人たちの目に、ニューヨークの町並みが入ってきます。それと同時に、新移民全盛期の少し前にフランスから建国百周年を記念して贈られた自由の女神像が見えてきます。新世界に夢を抱き、長い船旅を無事終えてアメリカに着いた欧州からの移民たちは、ニューヨーク湾の小島に立ち、旧世界に向けて明りを照らし、自分たちを歓迎する自由の女神に対して、いったいどんなことを感じたのでしょうか。

到着した移民は、自由の女神像のある島、リバティ島のすぐマンハッタン

寄りにあるエリス島に上陸しました。ここに今はもう使われていない移民局の施設が作られ、旧世界からアメリカにやってきた移民は入国を許されるまで、全員がここに一時収容されました。文盲であったり病気があったりすると、時にはそのまま出発地まで送り返されることもあったようですが、入国を許されると、マンハッタン南端の繁華街・ビジネス街をはずれた、やや北で東側のイースト・サイドにあった共同住宅や、エリス島の西にあるニュージャージー州に移り、新しい生活の一步を始めたのです。今もイースト・サイドに、外見のよく似た建物がずらっと並んで立っているのを見ることができます。このように旧世界からやってきた人たちにとって、ニューヨークの自由の女神は自由とアメリカの象徴であり、合衆国民にとっては国の理想とともに新しい移民も象徴しているわけです。

移民局の施設として同様の役割をサンフランシスコで果たしたのが、ゴールデンゲート橋の近くにある、エンジェル島です。こちらは主にアジアからの移民の受け入れですが、この島の施設が使われた頃には、もう日本からの移民はほとんどなくなっていて、収容されたのは中国からの移民がほとんどだったようです。エリス島の移民局施設を通過し入国を許されるのも、決して容易でなかったようですが、それにもましてエンジェル島での審査は厳しく、何年もの間、この島に収容されたまま入国できなかった中国系移民も少なくなかったようです。旧世界からの移民にとって、ニューヨークの自由の女神とエリス島が新しい国での希望を象徴したとしたら、中国系の移民にとって、サンフランシスコとエンジェル島は恨みと悲しみ、絶望の象徴であったということをよく聞きます。いずれにせよ、エリス島もエンジェル島も、どちらも新しい移民たちとその子孫にとって、合衆国民としての原点となったわけですが、その後は移民の事前審査と航空機などによる入国が増え、移民入国地は各地に分散し、施設は使われなくなり荒れたままになっていました。最近は合衆国の歴史的記念碑として保存するための補修が行われたということです。

母国の都市より多い人口

さて、移民の特別な入国地でなくなっても、ニューヨークに現在も最も多

様な文化と民族が集まってくることには変わりはありません。ニューヨークにはすでに世界中の民族が住んでいますし、合衆国内からそして世界中から観光客が訪れます。すでに述べたように17世紀にもたくさんの言葉が話されていましたが、現在では世界中の言葉で毎日この市内で話されない言語はないと言っても誇張でないくらい、色々な言葉が話されています。国連本部があり、そこに加盟している国は市内に代表部があって外交官がいますから、その言葉は毎日確実に話されているはずです。移民にとっても仕事を探し生活を始めるのが容易なので、新しい市民の割合が現在も非常に高いことがあげられます。たとえばタクシーの運転手が英語を話せないということで苦情が出たり問題になったりします。運転手の資格が難しくないものですから、移民してくるとタクシーを運転するわけです。また私の経験でも、街を歩いていて道を聞かれることがしょっちゅうありました。相手が何人種であるかなどということをいちいち考えないのがニューヨークです。色々な人がいて、皆それぞれ違うわけですから、あれは何人、これは何人などと考えていたら、とても間に合いません。ですから人種差別など、やってはいられないということになります。

たいへん興味深いのは、市内に大きな人口をかかえる民族集団を考えると、母国のどの都市よりもニューヨーク市内に住む人口のほうが多い場合が少なくありません。たとえばユダヤ系住民ですが、厳密なことは誰にも分かりませんが、現在のニューヨーク人口の20から30%、つまり約4分の1がユダヤ人であると言われています。ですから、ニューヨークの全人口を考えれば、ユダヤ系の人たちはニューヨーク地域に世界中で最も大きな集団を持っていることになります。アイルランド人やプエルトリコ人にとっても同じように、自分たちの首都がニューヨーク市であると考えてもいいくらいです。ニューヨークを首都のかわりにできそうな民族集団がたくさんありますが、それは人口が多いだけでなく、アメリカには政治的な自由があるからです。この国ではどんなに政治的なことも許されますから、本国でできないようなことも米国ではできます。ですから亡命者がニューヨークに集まるということもあります。

あるいはアイルランド系を例にとれば、市内にたくさん住んでいます

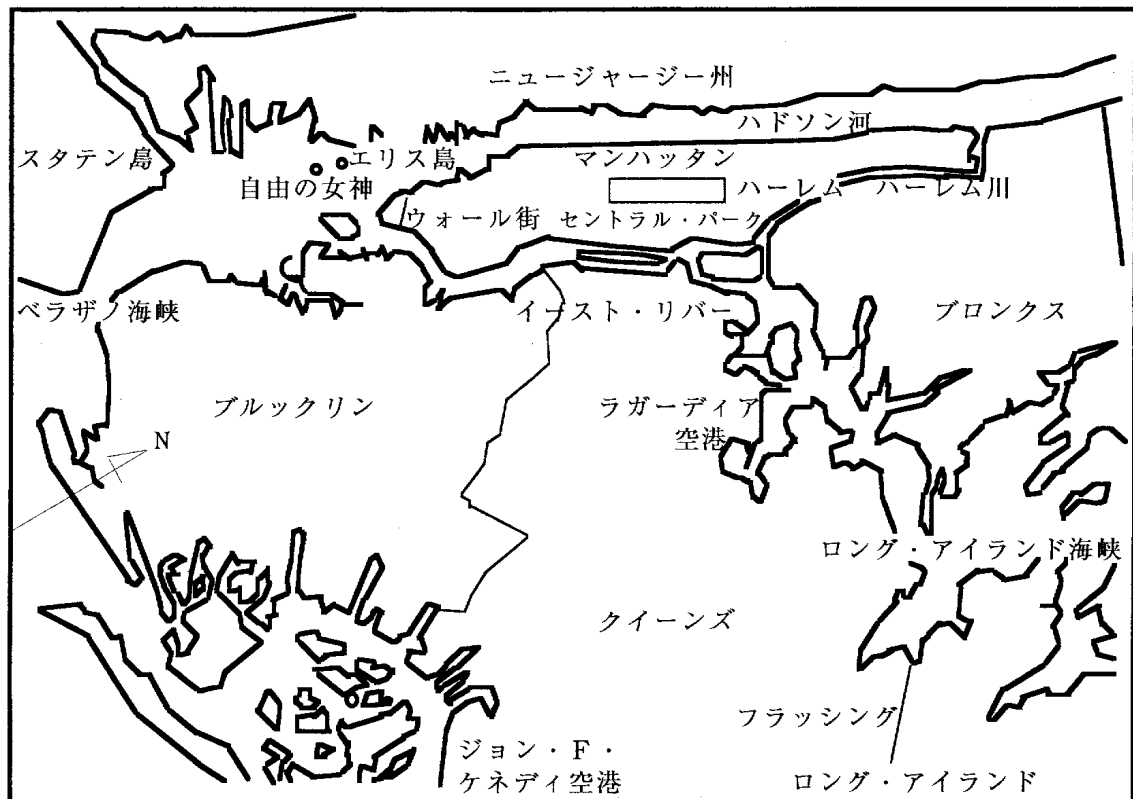
(全人口の約1割ほど)、アイルランド人というのは英国をたいへんに嫌うことが多い。アイルランドとイギリスの関係は、韓国と日本の関係に似ていて、アイルランド人の感情は日本を嫌う韓国・朝鮮人の感情と似ているのかも知れませんが、市内にたくさんいるアイルランド系の人たちは何かあると、自分たちの母国あるいは祖先の国であるアイルランドを考え、支援するわけです。その主張が米国のイギリス政策あるいはアイルランド政策というものにかなり反映されます。そのような政治的な支援だけでなく、経済的に考えても、住民グループによって集められた、たくさんの資金がそれぞれの母国へと送られるということがあります。

今述べたような意味において、色々な民族が市内にそれぞれ多くの人口を持つことは、ただそれだけでこの街が世界各国に多大な影響を与えていることになります。また市内には国連本部がありますから、世界中から色々な人たちが色々な理由で押しかけてきます。国連本部前でデモをやるとか、あるいは別の方法で圧力をかけたいとか、陳情したいとか考えます。観光やビジネスだけでなく、政治的な理由でも、本当に色々な人たちがたくさん、ニューヨークに集まってくるようになります。

ニューヨーク市の地理

そのような多様な人たちは、市内の各地域に均等に、均質に分布して住んでいるわけではありません。どの地区に、どのような民族が多いか、どこに集中しているか、ということは、おおざっぱなことしか言えませんが、これから簡単に見ていききたいと思います。その前にまず、ニューヨーク市の置かれた地理について解説したいと思います。

ニューヨーク市は5つの行政区 (Boroughs) からなりますが、これらはそれぞれがニューヨーク州の郡になります。ご存じのように、この市の中心はマンハッタン区で、これは郡で言えば、ニューヨーク郡ということになります (ニューヨーク市略図を参照してください)。ハドソン河をはさんだ市の西側はニュージャージー州です。ニューヨーク市、特にマンハッタン島はハドソン河の河口にあることになりますが、マンハッタン島は三角州ではなく、ほとんど一枚岩でものすごく強固な岩盤の上にあります。地震がほとん



ニューヨーク市略図

どないこともあり、早くから高層の摩天楼が立てられました。ハドソン河自体も大きな川で、流量もたいへんに豊かな川です。もっとも、この河の水はたいへんに汚れていますが、かなりの急流であり、ニューヨーク湾に流れ込み、最後には大西洋へと流れ出ています。

この河の流れ着く先に、ニューヨーク湾があります。湾の西のニュージャージー州側にも、東のブルックリン区側にも、たくさんの港湾施設があって、入口はベラザノ海峡と呼ばれますが、この狭い入口に守られた、非常によい港になっています。湾の先のほうの、海峡の西側でニュージャージー州に近い位置にある島がスタテン島で、ニューヨーク市の一部です。この島がひとつでリッチモンド区ですが、市の中心からかなり離れていて、フェリーでないと行けません。そういうこともあり、この地区はニューヨーク市の中でも、ちょっと変わっているところです。どういうふうに変わっているかと言えば、ここはかなり白人の割合が高い地区です。他の地域は、いろいろな人種・民族が混じっていて、白人以外が多いのですが、ここは白人

が多いということになります。市内の他地域との共通性の低さや、地区住民が負担する市税の割合の多さなどから、ニューヨーク市から分離しようという運動もかなりの支持を集めているようです。このスタテン島に行くフェリーは、途中で自由の女神像があるリバティ島や、すぐそばの移民局施設のあったエリス島の近くを通ります。

さてマンハッタンはほぼ南北に細長い島ですが、その東側にはクイーンズ区（同名の郡）とブルックリン区（キングス郡）とがあります。これらの区はロング・アイランドという大きな島の西端、マンハッタン寄りにあります。ベラザノ海峡はロング・アイランド（のブルックリン区）と、先ほど述べたスタテン島の間にありますが、ここにかかる巨大な吊橋はニューヨーク・マラソンの出発点としても知られていますが、リバティ島あたりからも見えます。ロング・アイランドの北にはコネチカット州がありますが、その間はロング・アイランド海峡という、細長く、かなり大きな内海です。クイーンズはマンハッタンのだいたい東の方向、そしてブルックリンはだいたい南東にあたります。この2つの区とマンハッタンの間がイースト・リバーで、国連本部のビルが河岸近くに立っているので有名です。川の形をしています。これは川というより湾あるいは内海です。また、ロング・アイランド西端の市内地域に、空港がふたつあります。国際線用のケネディ空港と国内線専用のラガーディア空港です。ラガーディアというのは、ずっと以前の市長の名前です。ニューヨーク近くにはもう一つ、国際・国内線兼用のニュワーク空港がニュージャージー州にあります。

ニューヨーク市の5つ目、ブロンクス区はマンハッタンからは東北方向で、ハドソン河から分かれてイースト・リバーへと流れるハーレム川の対岸にあります。多くの荒廃した街区で知られるニューヨークでも、ここは特に荒れていて犯罪の多い地区です。大リーグのヤンキース球場がある南ブロンクスは、その名前が米国では都市問題の代名詞になるくらい、全米に悪名が知られています。このようにニューヨーク市は5つの行政区からなりますが、もともとはマンハッタンだけがニューヨーク市だったわけで、他は後から合併したもののようです。特にブルックリン区は昔はブルックリン市でしたが、19世紀から20世紀にかけての頃だと思いますが、合併することで

ニューヨーク市ブルックリン区になったのです。

もう少しロング・アイランドについて述べれば、この細長い島の南側はずっときれいな砂浜で、夏には海水浴場になります。この海岸のニューヨーク寄りには、小さな島が点在する、干潟のような浅い海があります。しかしどちらかと言えば、海産物で知られるのはこの島の北側にあたるロング・アイランド海峡側でしょう。また、ロング・アイランド東側の部分もニューヨーク州の一部ですが、ナッソー郡とサフォーク郡とになります。ナッソー郡はニューヨーク郊外の住宅地ですが、サフォーク郡には別荘地がたくさんあり、島の先端に近いほど高級な避暑地になります。

特定の民族が集中している地域

どの民族集団が、今解説してきたマンハッタン、スタテン島、ブルックリン、クイーンズ、そしてブロンクスの5つの地区に多いのでしょうか。まず、よくアフリカ系とも呼ばれる黒人の多い地区を考えてみましょう。市内の全人口の約15%を占めると言われる黒人たちは、スタテン島にはあまり多くありませんが、その他の全域に住んでいます。その中でも特に多いのが日本にもよく知られたハーレム地区で、マンハッタン島北部の東側の地区です。先ほど述べたイースト・リバーにそそぐハーレム川のため、マンハッタン島が細長くなっています。そのハーレム川に面したマンハッタンの地区がハーレムということになります。

このハーレム地区の中心は125丁目の大通りです。ハーレムは合衆国の黒人・アフリカ系市民にとっての首都であり、125丁目はそのメイン・ストリートであるとよく言われます。ここがジャズを始めとする、米国の黒人文化のひとつの中心です。この地区には、ゲットーと呼ばれるような荒廃した街区だけでなく、たいへんに高級な住宅地もありますが、住民はほとんど例外なく黒人です。最近は再開発のため、かなり高いビルが立つようになりました。アフリカ系の人たちはハーレムだけではなく、ブルックリンにもクイーンズにも、たくさん住んでいます。その他に、特に黒人の多い地区はブロンクスということになります。先ほども触れましたが、ニューヨークで特に治安が悪く荒廃しているのがハーレム川をはさんだ対岸の南ブロンクスで

あり、ハーレム地区よりずっと大きな問題を抱えています。そのような地域に、黒人・アフリカ系の人たちが多いのです。

続いて、ユダヤ系の人たちですが、ニューヨーク市の全人口の4分の1を占めると言われるほど多く住む民族集団ですから、市内の全地域に住んでいます。ユダヤ系が特に多いのが、イースト・サイドやグリニッチ・ビレッジなどを含むマンハッタン南半分と、ブルックリンの南側ということになります。それから特にタイムズ・スクエアより少し北に位置し東西に走る狭い道路である、マンハッタン中央部の西45丁目はダイヤモンド宝石店街として有名です。ここの宝石店の経営者の多くがユダヤ系といわれ、実際に近くで、南ブルックリン地区から通ってくるらしい、もみあげを長くのばし、黒い帽子に黒い服の正統派ユダヤ人男性をよく見かけます。

ユダヤ人というのは、基本的にはユダヤ教の信者のことを指します。つまり、宗教がこの民族集団の最も重要な特徴になっています。一口にユダヤ人と言っても、黒人が皆同じでないのと同様に、色々な人がいます。ニューヨークでは今述べたような、ユダヤ教を強く信じる正統派の人たちが特に目につきます。これはユダヤ人の祖国であるイスラエルよりも、ニューヨークに正統派の人たちが多く住んでいるからです。正統派で過激なユダヤ教信者はどちらかといえば、ニューヨークで生まれ、イスラエルに移住することが多いようです。しかしニューヨークのユダヤ人には、先祖がユダヤ系であっただけで、それほどユダヤ教を強く信仰していない場合も少なくありません。そういう中には、特にリベラルな政治思想を持ち、黒人のように恵まれていない少数派民族に同情して支援したり、時にはイスラエルの政策を批判したりする者がかなりいるようです。ユダヤ系はカトリック教信者と並んで、一般に民主党支持の人が多く、政治的には左寄りの人も少なくないと言われますが、他方、全体的に経済力が強く知識人も多いことから、合衆国の中近東政策に多大な影響を与えています。

イタリア系は市の人口の10%を越える大きな集団ですが、集中していた地区はチャイナ・タウンのすぐ東に位置する、リトル・イタリーということになります。チャイナ・タウンはマンハッタン南部の地域にあり、近くには市役所などがあります。チャイナ・タウンのあるところは、もともとイタリ

ア系が多く住む地区だったらしいのですが、しだいにリトル・イタリーのほうに押されて、今ではリトル・イタリーにも中国系が入り込むようになりました。イタリア系はその他に、ブルックリンの南部、つまり大西洋岸近くに住む場合が多く、地中海系であるからか、住民は漁師であったり、シーフード・レストランを経営したりすることもあるようです。

それからスペイン語を話す、いわゆるヒスパニック系ですが、マンハッタン島の中央に位置するセントラル・パークの西側、アッパー・ウエストサイドに、かつてスパニッシュ・ハーレムと呼ばれた地区があり、そこに多く住んでいました。その他に、以前はマンハッタン南部に多く、現在はマンハッタン北部で黒人の多いハーレム地区のすぐ西や、南ブロンクス地区にもたくさん住んでいます。カリブ海周辺や中南米を出身地とするヒスパニック系は、市内の人口の10%ほどを占めるとされ、最も人口が増えているようです。特にプエルトリコ系などカリブ海周辺の出身者は、外見上ほとんど黒人と区別がつかない人が少なくありませんが、スペイン語を話すという文化上の特徴を持つ別個の民族文化集団となっています。

アイルランド系は、現在も母国との関係が強く、仲間うちで団結しているという特徴についてはすでに述べました。この集団も市内人口の10%くらいいるようですが、同じような数の市民がいるドイツ系と同様、市内全域に広く住んでおり、現在は特に集中している地域はないようです。あえてあげれば、マンハッタン南部やスタテン島になるのかも知れません。アイルランドの守護神である聖パトリックの日のパレードには、これほどアイルランド系がいるのかと驚くほどたくさんの人が行進したり見物したりします。この日は市内全域のバーで、“自称”アイルランド系も含めて、たくさんの人が夜遅くまで祝杯をあげます。

人口的にはそれほど多くはないものの、市内でわりに目立つのがアジア系です。特に中国系は大きなチャイナ・タウンがあるので、よく知られています。中国系の人たちは今でも盛んに米国に移住しており、特にニューヨークのチャイナ・タウンには新しい移民がたくさん集まってきます。他のアジア系としては韓国系やベトナム系が最近多いのですが、アジア系が多く住む新興の地区として、クイーンズの東端の地区が知られるようになってきまし

た。ここのフラッシングという町には、日本から進出したスーパーもあり、日本の食品が購入できますので、私もよく買い物に行きました。その他にマンハッタン中央の繁華街にあるエンパイア・ステート・ビル周辺にも韓国系のビジネスがたいへんに多いことに気づきます。どうしてそうなのか、ちょっと不思議な感じがしますが、この地区は米国の衣料や繊維関係の流通における最大の拠点であり、韓国系のビジネスもそれに関連した企業や商店のようです。そして韓国系の人たちで特に最近目立つのは、24時間営業の食品店・八百屋をやる場合が多いということです。これらの商店は市内の全域に広がっているようです。

最後に日本人や日系の人たちですが、全米どこの都市でも同じように、ニューヨーク市でも特に集中している地域はありません。市内や周辺に約5万人ほど住んでいると言われますが、日系人や日本から派遣された駐在員などの家族は市内よりも郊外に多く、マンハッタンから見たハドソン河の対岸であるニュージャージー州や、東北の方向のコネチカット州、北方向での郊外のウエスト・チェスター郡の周辺に多く、しかもこれらは郊外のわりと高級な住宅地です。日系人というのは特に集中して住むことはあまりないのですが、それでも日系・日本人が多く住む都市には、ニューヨークだけでなく、たとえばロサンゼルスでも同じですが、たくさんの日本食レストランができるし、またカラオケ・バーなどの営業も盛んです。わが国の経済力を反映しているという面もあり、特に日本食を始めとする日本文化が意外に米国で人気があるという事実も関係しますが、特に日本からの滞在者はどちらかと言えば閉鎖的で自分たちだけで生活し、あまり他民族とつき合わないということや、自文化に固執して自分たちのやり方をあまり変えず、どちらかと言えば地元のやり方に合わせない、現地のことをあまり習わないという形で生活するという面があるのも事実のようです。

移民について

移民の移り変わり

このように様々な民族が混在して住むニューヨークや、アメリカを理解す

るには、合衆国への移民の移り変わりということを考える必要があります。まず最初の移民ですが、よく知られた言葉でワスプ (WASP) と呼ばれています。これはアングロサクソン系のプロテスタント教信者ということの意味ですが、具体的にはほとんどイギリス系を指します。その他に、オランダや場合によればフランスなど西欧の一部も含まれるのかも知れません。現実にはワスプと呼べる人たちは、20～30年くらい前からニューヨーク市民の5%以下であると言われています。昔からのアングロサクソン系の移民は、もうすでに北米の他地域に再移住してしまったことや、それなりに経済的に豊かになると移民は郊外の住宅地へと引っ越していく事実が、割合の低いことを一部説明するでしょう。

次に入ってきたのは、ドイツや北欧諸国、そしてフランスからですが、その次にアイルランドからの移民が続きます。アイルランドからは、それからずっと続き、20世紀になっても移民が続きますが、ひとつにこれはアイルランドにおける大飢饉などの経済的状況がきっかけになっています。それとイギリスに対する独立闘争の関係で、相当数のアイルランド人が祖国を捨てて、アメリカに逃げました。これらの理由で、ニューヨークに住むアイルランド人が特に多いわけです。

その後はイタリアのようないわゆる南欧系の人です。続いてギリシャ人ですが、最後には東欧諸国からの移民が増えます。そして最も最近では、典型的な移民はアジア諸国から来ることが多くなります。たとえば、中国、台湾、香港などの中国系が一時多かったのですが、その他に韓国系やベトナム系がいます。第二次大戦後はベトナム戦争の影響もあり、アメリカ側についたベトナム人を戦争終結とともに多数受け入れたことが、ベトナム系移民を増やしました。アジア系と並んで最近多いのはヒスパニック系ですが、スペイン語を話す中南米の人たちで、特にプエルトリコ人を含みます。プエルトリコは合衆国の属領として50州の中に含まれず、英語とともにスペイン語が使われています。ここからの移民はずっと以前から多く、特にニューヨーク市内にたくさんのプエルトリコ系の人が住んでいます。

宗教ということで移民を見ると、最初のころの移民は英、独と北欧の諸国からのプロテスタント、つまりキリスト教の新教各派でした。その次の移民

はカトリック—キリスト教旧教であり、その信者は主にアイルランド、仏と南欧の諸国から来ました。プロテスタントは多くの場合、信教の自由を求めて新大陸へやってきましたが、続いて移民してきたカトリックに対して、今度は逆に差別したり国への忠誠心を疑ったりするなど、寛容でない面も多々ありました。カトリックたちとほぼ同時に、ユダヤ教の信者（ユダヤ人）がヨーロッパの各地から移住してきました。また、これに続いて、東欧の諸国から東方教会の信者やユダヤ人が移ってきました。東方教会というのは、キリスト教で旧教とよく似ている、ギリシャ正教やロシア正教などのことです。ユダヤ人の移住は、ドイツでのナチスの台頭とともに急激に増えました。その後、ソ連から移住するユダヤ人もイスラエルだけでなくアメリカにも行きました。最近の移民はアジア系が増えていますから、移民に多い宗教もイスラムとかヒンズーとか仏教になっているでしょう。このように移民を時代で追っていきますと、入ってくる宗教の移り変わりが民族の変化と重なって見えてきます。

また17世紀と18世紀にアメリカに来た人たちを建国の移民とすれば、19世紀の移民は、今から名づければ、旧移民ということになります。彼らも主にプロテスタントであり、西欧や北欧の人たちです。それから19世紀の末から20世紀の前半にかけての移民は、新移民と呼ぶことができるでしょう。これは主にアイルランドや南欧からのカトリックや、続いてユダヤ人や東欧諸国からの移民です。20世紀後半から現在は新々移民となり、第二次大戦後のアジアからの移民であり、また中南米からのヒスパニック系の移民です。ニューヨークはこの中でも新移民や新々移民の割合が高いということになります。また、こういう移民の移り変わりを見ていくと、いわゆるアフリカ系と呼ばれる黒人たちがたいへんに特異な存在であることが分かります。その多くが自分たちの自由意思で移住してきたのではないのですから、かれらには移民というイメージはありません。ですから、移民史にも黒人たちが出てくるのが少ないのです。

新しい移民の地位

特に最近の移民で目立って成功しているように見られているのが、韓国系

の人たちです。この民族集団は特に最近、市内の全域で24時間営業の食品店・八百屋を経営し、商売が繁盛しているようなイメージがあります。韓国系の人たちは団結心が強く、店を始めたりするときにお互いに助けあったり、同郷の卸売業者が商品をどんどん配達してくれるようなところがあります。それで韓国系の人たちは、たとえば夫婦だけで24時間営業してしまい、商売もわりとうまくいきます。そういう24時間営業の食品店・八百屋は市内全域にあります。韓国系の人たちは、こういう店を経営する形で、どのような地域にもどんどん入り込んで行くわけですが、どんな地域にでも入って行くというところに、問題を引き起こすような面もあります。

八百屋などの商売を韓国系の人が始めるのは、以前からあった店であまり繁盛していないようなところを借りるわけです。以前は昼間しか開いていなかった店を借り、24時間営業を始めます。そうすると近くの人たちは喜びます。治安の悪いところで、24時間店が開いていますと、いざとなれば店に駆け込むことが出来るし、店の近くは夜も安全になるわけです。そうして韓国系の人たちはハーレム地区のようなところでも、わりと平気で入り込んでいきます。しかし、地域のアフリカ系の人たちには、店のおかげで便利になり安全になったとしても、ハーレムはやはり自分たちの縄張りだという意識があります。それで他の地域と同じような形で商売をしていると、自分たちの縄張りで、後からやってきたのがうまいことをやって金儲けをしているというので、強い反発を受けるわけです。

韓国系の人たちに言わせれば、そんなことを言うのなら、黒人たちも同じように一生懸命働けばいいではないか、同じように商売すればいいではないか、ということになります。そうしないから韓国系の店にかなわないのだというわけです。そういうこともあり、韓国系と黒人とは、一般にあまり仲が良くありません。それだけでなく、時に韓国系の店で事件が起こります。たとえばアフリカ系の多い地域では、当然、地元の子供たちが店に来るのですが、中には万引きのような悪いことをする子供もいます。そうすると韓国人はよく、そういう子供を捕まえて叩いてしまうわけです。日本にもそういう人がいますが、韓国人にも体罰を与えるような人がいます。韓国系にはかなりきつい人が多いようで、それは多分、韓国からの移民、特に男性は軍隊経

験を持つ人がほとんどだからではないかと思います。それであまり遠慮しないのかと思いますが、いくら悪くても米国では体罰は許されません。地元住民の間でものすごい反発が起こります。悪いのは分かるが、叩くのは許せないというわけです。

先日のロス暴動の際にも、ロサンゼルスの人たちと韓国人の間には感情的な対立があって、韓国系の商店がたくさん狙いうちされ、略奪にあいました。もちろん暴動に参加したのは黒人だけではありません。ヒスパニック系も白人もたくさんいましたし、アジア系さえもいたようです。それはともかく、韓国人街が放火され、たくさんの店が燃えたのですが、そのひとつの理由として、韓国人街という独立した地域を作り上げてしまったことが問題といえれば問題であると言えます。そして、この韓国人街も韓国人がたくさん移り住む前は、黒人たちの街だったことがあげられます。自分たちの街だというのなら、自分たちで再開発すればよかったではないか、というのが韓国系の人たちの言い分でしょう。あまり経済的に良くない、さびれた地域に入って行って、自分たちの汗と努力で再開発して立派な街を作り上げたという意識があります。

それに加えて、ロス暴動の少し前に万引きしたか何かの疑いで、韓国人店主がアフリカ系少女を銃でうち殺した事件がありました。それもひとつのきっかけになって、相当に韓国系の店が狙われ、暴動の被害を受けたというふうに考えられます。韓国系の人たちもなかなか強く、負けてはいませんから、その時も何人もの男たちが店の屋上にあがって自動小銃を発射するシーンなどが報道されました。このように、ロサンゼルス市でもニューヨーク市でも、黒人たちと韓国系の人たちの間にはかなり強い対立感情がありました。ニューヨーク市では、黒人とユダヤ人との間にも類似した対立感情がありました。このように少数派民族同士がいがみ合うのは、悲しいことです。よくあることです。

同じ職業での民族の移り変わり

それと食品店や八百屋を営む人たちを見ていくと、少し面白い現象があります。それは、ニューヨーク市ではいろんな職業がだんだん新しい移民

によって、とってかわられるということです。たとえば、八百屋であれば、一番最初は多分、イギリス系か北欧系がやっていたのですが、その後つい最近まで八百屋であればイタリア系というイメージが強くなり、次いでこの職業についたのはギリシャ系が多かったようです。それが今では韓国系が多くなり、八百屋、それも24時間営業ということなら、現在は韓国人経営ということになっています。つまり、次から次へと代替わりをするというか、後から来た新しい移民が特定の職業を取っていくということになります。

もうひとつの例として、警察官や消防士があげられるでしょう。一番最初はやはり、これもアングロ・サクソン系だったのですが、そのうちに大多数というか相当数がアイルランド系になります。もちろん、アイルランド系は市内に10%ほどもいて、すでに話したようにアイルランドの首都であるダブリンよりもニューヨーク市内に住むアイルランド系が多いわけです。それで警察官や消防士が多いのは当然とも言えますが、その次にだんだんイタリア系が増えてきて、警察官や消防士にはイタリア系が並んで多いようなイメージがあります。現在はどの民族が特に増えているのかよく知りませんが、今でも警官や消防士のなかにアイルランド系やイタリア系の人たちがわりに多いということも事実のようです。

警察官の相手になる犯罪組織ですが、徒党を組んで悪いことをする連中も、一番初めはイギリス系や北欧系だったのでしょう。しかし、しだいにアイルランド系やユダヤ系が力を持ち、その後はイタリア系マフィアが有名になります。犯罪組織としてマフィアが出てきたのは、イタリア系移民が増え、それなりに経済力を持ち始めたところで、それまでの犯罪組織にとってかわって力を得たからであり、イタリア系が特に犯罪的であったり暴力的であったりするわけではないのです。少し前の時点で見れば、確かに組織犯罪に関係した者の中にイタリア系が多かったのですが、それはあえて言えば歴史的な偶然ということになるでしょう。そして今、犯罪組織として台頭しつつあるのが中国系マフィアであるとよく言われます。ですから、現在はイタリア系と中国系が暗黒街で覇権を争っているのかも知れません。ということで、主要な組織犯罪者たちも代替わりをしているわけですが、それが

もっとまともな、政治や経済分野での同じ民族の勢力や影響力の生長を反映しながら変化していることに注目すべきです。

そして、色々な分野でのこのような代替わりを見ていると、興味深いことがひとつあります。それは、黒人・アフリカ系はいつまでたっても一番裾野というか底辺にいることです。彼らは代替わりをして上にあがって行くことがほとんどありません。すでに述べたように、彼らが移民であった時期はこれまでになかったのです。米国の歴史を見ても、ずっと昔から黒人は住んでいるわけで、それにもかかわらず、後から来た移民たちが次々に上にあがっていきます。そういうことを見ていると、アフリカ系の人たちが絶望的になり、無力感を持つのは理解できると思います。新しい移民に反感や対立感情を持ち、一番の新参者であるアジア系、特に韓国系の人たちに対して嫉妬や恨みの気持ちが出てくることも理解できます。それはもちろん、あまり良いこととは言えませんが。

一般のアメリカ人の中にも、移民が一番下の底辺から努力でのし上がってゆくというイメージがありますが、実際の移民はかなり能力の高い人たちで、それなりの資金を持参して入国してくるわけです。それがアメリカという国の活力を支えている、ひとつの事実です。言うなれば移民は米国の尽きることのない資源・宝なのです。それに対し、黒人たちはずっと長くアメリカに住んでいますが、新しい移民たちと競争できるような能力や資金力を持ってないし、持たされないような社会ができあがっています。それが米国での黒人に対する差別のひとつの側面と言えるでしょう。

おわりに

民主主義と社会の変化

ニューヨーク生活でひとつだけ特に紹介したい、私自身が経験した印象的な出来事があります。それは運転免許の書き換えでチャイナ・タウンに近い市役所の近くにある州役所のひとつに行った時のことです。運転免許は警察ではなく、陸運局のような州役所が出していますが、当日は同じように書き換えする人で混んでいて、ずらっと並んで待っていました。お昼ごろだっ

たのですけれど、なかなか進みません。一人ひとりの手続きに手間どり進まないで、ロビーがいっぱいになっていました。ところが1時間ほどたったころ、後ろのほうから大きな声が聞こえてきました。「なぜ皆、我慢しているのだ」という怒鳴り声です。声のほうを見ると中年の白人男性でした。その人は、「なぜ皆、我慢しているのだ。こんなにサービスが悪いのは許せない。我々は税金を払っているのだ。なぜ皆、黙っているのだ。責任者（マネージャー）を呼べ」と、大きな声で言ったのです。それが窓口越しに事務室のほうにも聞こえたらしく、とたんに窓口が3つか4つ開き、行列が前よりも早く動くようになりました。

このことが印象深かったのは、ふたつの点でそれがいかにもアメリカ的であると感じたわけです。ひとつは納税者である我々が社会の中心なのだという発言と、それに対する建前めいたとも言えるほど素早い、公務員たちの反応です。そこの職員が特にさぼっていたとは思えません。ただ単に休憩していただけかも知れません。しかし、そういう体験から、さすがにこの国は本当の民主主義の国だと思い、たいへんに強い印象を受けました。私自身は市民でなく税金も払っていなかったし、一緒にいた人たちも多くは少数派民族でした。それで待たされても黙っていたわけですが、結局、最後にそういう強い発言をしたのは、昔からそうすることを多く経験しながら生活してきて、慣れている白人の男性だったわけです。こういう時に発言するのは、やはり白人男性が多いのだということを実感したのが第2の点です。もっとも、こういう時は少数派や女性もおとなしいのかもしれませんが、たとえば女性に対する偏見・差別が少しでも見えるような状況では、アメリカ女性たちはまったく容赦せずに反撃します。性差別については、彼女たちに少しもおとなしい点がないことを強調しておきます。

少数派や女性が比較的控え目なのは、過去の差別的な社会を引きずっているからでしょう。昔は偏見・差別がひどかったし、州によっては1950年代まで異人種間の結婚を禁止する法律がありました。信じられないことですが、カリフォルニア州でもこの時期まで白人と黒人あるいは白人と日本人が結婚することが法的に許されませんでした。しかしその後、公民権運動が盛んになり規制する悪法はなくなるし、いわゆる差別も減りました。もう結婚

や恋愛は人種ということは関係なく、まったく自由ということになっています。全体的にいて人種差別はどんどん減っているようです。裏のほうではあるのかどうかは知りませんが、とにかく見ている前では起こりません。私自身のアメリカ生活でも、あからさまに差別された経験はまったくといってよいほど思い出せません。もちろん、私がつきあっていた知識階級の人たちとは違って、今でも一般人の中に差別的な人間が少なくないことは否定できません。しかし、アメリカ社会が確実に変わりつつあることを理解すべきでしょう。それに少し前に述べたように、ニューヨークというのは人種差別の少ない都市です。とにかく色々な人たちが多くて、相手がどんな人種かとか、どこの人間かとか一々考えている時間はないし、まして差別などやってはいられない、というわけです。

都市論とニューヨーク

少し前に新移民・新々移民ということを述べました。たとえば、中国系の人がアメリカに移民すると、何とはなしにやはりニューヨークとかロサンゼルスというよう大都会に集まってきます。そういうわけで、チャイナ・タウンには到着したばかりの新しい移民がたくさんいることになります。何年前の調査では、あるいは今も同じかもしれませんが、ニューヨーク市の住民の約半分が1世か2世だったという結果がでています。いずれにしても、新移民や新々移民がたくさんいるということで、ニューヨークはアメリカのようであって、あまりアメリカ的でないのです。非常に多様な文化があり、色々な人たちが住んでいる点では、いかにもアメリカ的であるし、しかも国の経済や文化の中心ではあるけれど、合衆国の他地域に比べ、たいへん変わった街です。その住民はまだまだ自分や両親の母国・出身地の文化を引きずり、自分たちのやり方の中で暮らしていて、アメリカ文化の中で生活していません。そういう意味でニューヨークは典型的なアメリカの都市とは言えないでしょう。豊かで陽気で友好的、そして白い肌、青い眼、金髪という、日本人の多くが持つであろうアメリカ人のステレオタイプと合致する人は、アメリカ全土でも実際にはあまり多くはないのですが、ニューヨークには特に少く、その住民の多くは「典型的なアメリカ人」から最も遠い人

たちなのです。

それともう一つ、広く都市論の立場から重要だと思われるのは、昔からあった国際都市、コスモポリタンな都市—コスモポリスとなりますと、ほとんどの例が、人種的・民族的・文化的な多様性があったとしても、たぶん上流階級における多様性のみであり、上流階級だけの国際都市だったのではないということです。それと違いニューヨークは過去も現在もこれからも、上から下まで全部の階層で、色々な民族・文化が混在する国際都市であることが指摘できると思います。それが、ニューヨークが特にユニークな国際都市である特徴のひとつと言えるのではないかと思います。

また、米国における都市についての思想を考えていくとき、都市に対する反感、反都市的な発想というものがあることに気づきます。これは授業でよく学生に言うのですが、米国には過密の問題はあっても過疎の問題はない、ということです。実際に奇妙なことにアメリカでは過疎の問題ということを知ったことがありません。彼らは過疎ということが問題であるとは思えないようです。自分の好きなところに誰にも邪魔されないで住むのは理想ですから、過疎だといって問題にする必要はないわけです。過疎も一極集中や過密と同様、大問題であるとする日本人からすると、たいへんに面白い発想です。

過疎ということの問題にしないのは、ひとつには自作農が民主主義の基本であるという、ジェファースン民主主義の考えが今でも米国に強く、自立・独立の考え方や田舎で生活すること、あるいはフロンティアを開拓していくことを重視する考え方があるからでしょう。それを言いかえれば反都市的な思想や都市に対する反感でもあるわけです。私の知っているずいぶん多くの人が、「なんだ、お前はニューヨークなんかに住んでいるのか。あんなところによく住めるな」というようなことを言いました。観光でちょっと行くのならいいけれど、住めないよ。物価は高いし、犯罪は多いし、貧乏人だらけで、ホームレスもたくさんいるじゃないか、あの都市はいったい何なのだ、あれはアメリカなんかじゃない、というような非常な辛辣な意見や感想がたくさん出てきます。

確かに犯罪ということのひとつ取っても、アメリカの都市にとっては大き

な問題です。ニューヨークも犯罪の多いところですが、つい最近の犯罪統計を見ますと、ここは全米の最悪のワースト10に入っていません。犯罪の発生率は、全米的に見ると12~13番目くらいようです。犯罪が多いようなイメージがあるが、さらにもっと悪い都市が少なくないということのようです。その統計によると、最近、最も治安が悪いのはジョージア州のアトランタ市らしいです。アトランタというのは、この次のオリンピックが開かれるところですが、ほんとうに大丈夫かな、などと考えてしまいます。ニューヨークに戻りますが、確かに犯罪が多いイメージがあります。しかし約7年間のニューヨーク生活で、私自身が犯罪に巻き込まれたことは1度もないし、危険を感じたことも恐いと感じたこともありません。もっとずっと若かった頃、夜に新宿あたりを歩いた時のほうが、はるかに恐く感じたと思います。

ディナー・プレート（大皿）の喩え

さて最後に再びメルティング・ポットという考え方を見てみましょう。メルティング・ポットということが本当に現実に行き起きているのでしょうか。これが特に人種が混じり合うという意味ではないということはすでに述べましたが、混血によって人種が混じるというような現象も世界中ではあちこちで徐々に起きていて、米国にもまったくないわけでもありません。異人種間の結婚を禁止する法律はなくなりましたし、南部などの1部を除いて、異人種間の恋愛や結婚に対する反対も昔ほど強くなっています。第二次世界大戦後は、そういう意味あいも含め、「メルティング・ポット」は世界中の民族と文化がアメリカで、本当に混じり合い、溶け合うという意味に取られる時期もありました。しかし、たくさんの人がいて色々な文化があるけれども、メルティング・ポットのように混じり合い、溶け合うということがアメリカでも実現していないという指摘をしたメルティング・ポット批判の論文が、もうすでに今から20~30年も前に出されています。

それでもうご存じかと思いますが、メルティング・ポットということを今はあまり言わなくなりました。どうしてかというと、逆に多文化主義、多重文化主義、あるいは多元文化主義という、いわゆるマルチ・カルチャリズム

という考え方が定着してきて、何も混ざって溶け合うことはないのだということになったからです。溶け合ってしまうことはないのではないか、溶け合う必要はないのではないか、そんなうまく溶け合わないのではないか、ということです。一時期、もう十数年前になりますが、メルティング・ポットでなく、サラダ・ボウルということがよく言われました。「アメリカはサラダ・ボウルだ」というのは、細かく千切った野菜をボウルの中で混ぜ合わせて作る野菜サラダの連想から、色々な文化が、とにかく混ざるが、それぞれがまだ元の形と味を保っていて、文化が混ざるけれど溶け合わないアメリカの社会を、これも喩えで表したのです。最初のころにも述べましたが、日本でメルティング・ポットということをするときには、どちらかというと溶け合うようなイメージでなく、色々なものがいっぱい入って、ゴチャゴチャと混じりあった「サラダ・ボウル」のようなことを意味しているのではないかと思います。

ところがこの表現もやがて使われなくなります。やはり均質になるほど、野菜サラダほど、うまく混じり合わないのではないかという意見が出たからです。それにマルチ・カルチャリズムからは、混じり合う必要もないのだという考えが出ます。それぞれの文化をそれぞれが守っていけばよいのではないか。たったひとつのものに溶け合ってしまうより、色々あったほうが楽しいという考えです。このような考え方には、まだ適当な喩えがありませんが、あえて私が作るとすれば、アメリカ人がよく使うディナー・プレート（大皿）になるかと思います。アメリカの家庭では大きなお皿を食事に使いますが、それが最もよく分かるのは、自分で料理を皿にとる形の、バーベキューなどの（バイキング＝ブフェ式の）パーティです。大きなお皿を使って、それぞれが料理をお皿に取ります。そのお皿の上には、肉料理から野菜料理、サラダ、それにパンからデザート、果物まで、混ぜないのだけれど載せて、豪快に食べるような食事をします。それが私なりの喩えですが、大きなお皿に、混ぜないけれど色々載せて、たくさんの食べ物を同時にあれこれ楽しむようなやり方です。これがアメリカでの文化のあり方を、わりとうまく表しているように思います。

それに比べると、ヨーロッパはまだまだ伝統的なコース式のディナーで

しょう。いろいろあるけれど、料理同士は決して一緒に盛られないし、一緒に出されないで、それぞれが終わるのを待って次々に出てきます。料理は別々の皿で出されるわけです。また日本料理はどうかと言えば、これも料理が混ざり合わず、小さなお皿や鉢、椀で出されます。西洋のコース料理と違うのは、そういう小鉢がいつぺんに出てくることでしょうか。しかしアメリカ式と同じで、色々な料理を同時に味わうことはできそうです。また、アメリカ式の料理の食べ方、パーティのやり方が日本やヨーロッパでもこれから人気が出てくるのかどうか、興味深いと思います。今述べたような3つの喩えが、それぞれの文化の特質というか本質を表しているとはとても言えませんが、それぞれを理解する助けにはなるかと思っています。

私の講演のテーマは、ニューヨークとこの都市を象徴するようなメルティング・ポットの考え方でしたが、結論から言えば、そういう考え方はもうあまり使われていないということになるかと思っています。しかし、民族的に文化的に多様な都市、ニューヨークという事実は今までも、またこれからも変わらないでしょう。

付記：

この論文は、平成6年（1994年）度文学部公開講座「イメージによって読み解く世界の都市」で担当した講演の記録を少し手直ししたものです。ニューヨーク市は公開講座から約7年後の9月11日に同時多発テロに見舞われるなど、大きな変化がありました。内容も少し古くなりましたが、歴史的な記録の意味も含めて、紀要に掲載したいと考えました。